
教えてみたい

MMR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
教えてみたい

【コード】
N0138H

【作者名】
MMR

【あらすじ】
勉強を教えてもらうことになったけれど、教えてもらってばかりっていうのも悪い気がする。何かできないだろうか…？

「だーかーらー、ここのxに代入するの。どうしてわかんないかなあ……」

「悪いのお、どうしてもこの年になると頭が働かぬつて……」

「……ふざけるならやめてもいいのよ？」

「すみません、調子乗りました」

図書室の一角。テストも近いせいか、ほぼ全てのテーブルが学校の生徒で埋まっている。しかし、聞こえてくるのは本がめくられる音とシャーペンの走る音くらいだ。

そんな中で、俺は小声で話しつつ肩を並べている女子がいる。

事の始まりは1週間前だ。

一説によると、俺があまりに勉強ができないのでテストの際のクラス平均が下がっているらしい。

そこで、誰かサポートしてやれと先生から言い出したのだ。

というか、なんなのこのクラス公認のバカ扱い。

それでも俺がクラス内で浮いていないというのは奇跡的にも思える。友人いわく、迷惑なバカを通り越して笑えるバカということらしい。まったくフォロワーになっていない気もするが。

そんな面倒臭い俺だ、誰もそんな役引き受けるわけないだろうと思っていた。

しかし、中には奇特な人物もいるもので。

「私がやります」

それが、彼女だった。

「ふう……まあ今日はこんなとこね。次までにカンペキしておくこと。いいわね？」

「はいはい」

「はいは1回で十分」

「なんとというベタな展開だ…」

あらかたキリのいいところまで終わって、彼女は参考書をそろえる。

サマになっでいて、今の言動と相成ってまるで教師のように見え

た。
「しかし悪いな、付き合ってもらって」

「別にいいわよ、自分の分の勉強はやったし…教えることで理解も深まるし」

さすがだな、と思う。彼女は俺と違ってクラスストップどころか学年トップクラスの成績を誇っている。

だからこそ、俺のサポートを立候補した時にはざわめきが起こった。なんでそんな人が俺のようなレベルの奴に教えるのか。

それに、もう一つ…
と考えているうち、彼女は続けて言った。

「それに練習と思ってるから」

「ん？練習？」

「そう。学校の先生になるための」
さすがだと思えるのは、現状のことだけではなかったようだ。明確なビジョンを持って、この今の俺に勉強を教えていることも糧にしようとしているのか。

だから、俺のサポート役も引き受けたというのか。

ふとさっきまでのやりとりで、彼女が教師のように見えたことを思い出す。

自然に、言葉は出ていた。

「今すぐにでもなれそうな感じだな」

「わ、私なんてまだまだよ」

彼女が顔をそむける。それはちょうど夕日が差し込む窓の方向で、その顔を赤く照らしていた。

俺にとっては、その時が初めてだったかもしれない。

彼女が、普通の女の子らしく見えたのが…

いや、待て待て。俺は一体何を考えている？

何を今更。たとえ手の届かない人だと分かっている、俺は今までも彼女の顔を見てきたじゃないか。

さっき考えの途中でさえぎられたが、それは俺のサポートをすると言ったときにざわめきが起こった2つ目の理由でもある。

彼女はみんなの憧れの的だ。なかなかお近づけになれないというのが大勢で、ましてや彼女の方から積極的に誰かを名指してくるといふのはレアなことだった。

俺と彼女の接点と言えば、彼女にたまに勉強を聞きに行くということくらいだ。俺の周りでは理解できていない奴が多すぎて、この際なりふりかまっていられないと、彼女のところに行ってしまう手っ取り早い。何やらは一時の恥って奴だ。なんか違う気もするがと、そこまで考えて思う。その疑問を、考えるより以前に言葉に出していた。

「あー、なんか教えてもらってばかりで悪いな。なんかお返しに教えてやれることがあればいいんだが」

「え？」

ただ、言うてからしまったと思った。

自分の中では順序立てているが、彼女にとっては唐突すぎだ。

「あ…いや悪い、というのもだな、それは…」

「んー、教えてもらいたいことねえ…」

頭がパニックになってまったく話が先に進まない言葉ばかりを口に出してしまっていたが、意外にも彼女は俺の言葉に対して真剣に考え込んでいる。

俺はその後の言葉に驚くことになる。

「じゃあ、恋愛でも教えてもらおうかな」

「…なっ！何を！」

息が詰まって、声が裏返る。その時の心臓の動き方は、今までにありえないような…例えるならボールを思い切り弾ませたような感覚。

「…嘘よ、私が言い寄られていることくらい、知ってるでしょ」

あきれたというのが明らかに分かるくらい大きく息をついた彼女が言う。

「は、ははは…そうだな」

そこでなぜか、風が一つ通り抜けられるほどの沈黙があった。

「なんであなたに色々教えてあげてると思ってるのよ、バカ…」

「え？何が？」

「気が変わった！やっぱり教えてもらっから。それも次回までにカンプキにしておくこと！」

「え、え、何のことだよ！」

「知らない！その答えも次回までの宿題！」

もちろん、このやりとりで図書委員から注意を受けたのは言うまでも無い。

…俺も今じゃ、分からないけど。

彼女にいつか俺なりの答えを教えてみたい。それだけは強く思っていた。

(後書き)

迷走しだしてきました。何を言いたいんだかよく分からなくなってきたる…

無理しない感じで、今後はやっつけていこう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0138h/>

教えてみたい

2010年10月8日15時22分発行